甲斐みのり
中部
伝統通信

静岡県・浜松市

浜松張子

静岡県出身の文筆家・甲斐みのりさんが、中部地域に伝わる工芸や催事などの伝統文化を現場に赴いて取材・体験。今回訪れたのは、静岡県浜松市の張子制作現場！

取材・文
甲斐みのり

文筆家。静岡県富士宮市生まれ。旅や散歩、手みやげ、クラシック建築、暮らしと雑貨などを主な題材に、書籍や雑誌に執筆。著書に『ポケットに静岡百景』など。最新刊は『たべるたのしみ』（ミルブックス）。ドラマ『名建築で昼食を』（テレビ大阪・BSテレ東）の原案・監修を手がける。

形も表情も愛嬌いっぱい
五代続く素朴な張子人形

子どもの成長を願う犬張子。ぽってりとしたかわいいフォルム。

土地土地の郷土玩具は昭和の時代の定番みやげ

今でこそ旅のおみやげといえば、お菓子をはじめとした名産物が主流だけれど、食品の保存技術が発展していない時代は特に、旅や市や縁日のおみやげに土地土地の郷土玩具が選ばれていた。昭和の時代は我が家にも、父がコレクションした各地の郷土玩具をぎっしり収めたガラス棚があって、紙・木・土など身近な材料でつくる素朴な人形たちに子どもながらに魅せられた。そうして大人になってから『はじめましての郷土玩具』という本を書くまでに。数ある玩具の中で、とりわけ気に入っていたのが浜松張子の「酒買い達磨」と「犬ころがし」。どちらも愛嬌いっぱいで、和やかな表情に自然と笑みがこぼれてくる。

工房で間近に触れる歴代の人形の愛らしさ

浜松張子は地域ぐるみでつくられる郷土玩具と違い、ひとつの家系で受け継がれてきたもの。現在は、五代目・鈴木伸江さん一人が手がけるため生産数に限りがあり、愛好家の間でも人気が高く、なかなか手に入りにくい。

歴史の始まりは1868年（明治元年）。旧徳川幕臣・三輪永保が江戸から浜松に移り住み、官員として勤めながら江戸風の張子をつくり、酉の市で売り出したのが始まりと言われる。初代を継いで息子・三輪永智が製作を行うも、第二次世界大戦の空襲で全木型が焼失。戦争が終わり初代の六女・二橋志乃さんが木型を復活させて再び張子づくりを始めたのは、戦後の貧しい時代に子どもたちに玩具で遊んでほしいという想いから。毎日黙々と手を動かす姑を手伝い、四代目となったのが伸江さんの母・二橋加代子さんだ。伸江さんの工房には、歴代製作者の写真とともに、犬、うさぎ、たぬき、虎、猿、猫、鯛、エビ、達磨など、加代子さんが軽妙な筆致で描いた浜松張子の絵画が飾られていたが、人も人形も穏やかで優しい表情をしていた。

木型に美濃和紙を貼り、乾いたら刀を使って型から抜いて切れ目を糊で付ける。胡粉*1を膠*2で溶いて表面を白く塗り、その上から彩色するのが浜松張子の製作の流れ。中でも、おもりを入れた張子に車輪をつけて転がるユニークな犬やたぬきの「ころがし」は、全国的にも類のない浜松張子独自の構造。孫が遊んで壊れたからと修理の依頼もあるという。

「基本は同じようにと心がけても、祖母、母、私で顔が変わってしまう」と伸江さん。狙った演出ではない、無作為ににじみ出る違いや愛らしさを職人の個性として愛でるのが郷土玩具の醍醐味。人形それぞれにつくり手の想いが宿っているのを感じた。

取材協力／浜松張子工房

浜松市中区高林4-18-17
TEL／053-474-5466（鈴木伸江さん宅）

浜松張子五代目・鈴木伸江さんの工房で張子のつくり方や代々の話を聞かせていただいた。

浜松張子を代表する「犬ころがし」。右が四代目・二橋加代子さん、左が三代目・二橋志乃さん作。裏に作者の名が入っている。

浜松張子の一番人気は「酒買い達磨」。胴、手足、手に持つ小物を別々につくり、手間がかかる。

張子の材料は柔らかく伸びる美濃和紙。木型に貼って乾燥させ、刀で型抜きしてからまた貼り合わせる。

水や熱に強い木で木型職人がつくる張子の木型。戦後に三代目が復刻したものが一部いまも現役。

張子の型に膠で溶いた胡粉を塗り、乾燥したら彩色をほどこす。作業は全て一人で行う。

*1 胡粉＝貝殻が原料の白色絵具。　*2 膠＝日本画に用いられる画面と絵具を接着するもの。

趣味人たちを魅了する地域性

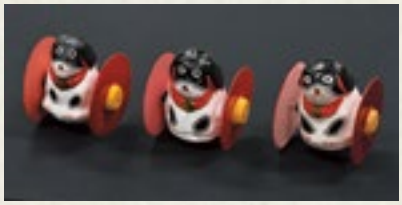
先々代の頃からつくればすぐ売れるため、鈴木伸江さんが所有する歴代の張子はそう多くない。そこで「浜松市博物館」を訪ね、2年前に企画展「郷土玩具趣味―〝かわいい〟の後ろにひそむもの―」を担当された学芸員・佐野聖子さんに、館所蔵の浜松張子や郷土資料を見せていただいた。

郷土玩具は子どものおもちゃとしてだけでなく、地域ごとの民間信仰に紐づくものも多い。1891年（明治24年）の発刊で、全国の郷土玩具を紹介する初めての書『うなゐの友』では、「遠州浜松玩具犬車」として犬ころがしの原型が紹介されているが、この頃から郷土玩具特有の郷愁に惹かれた趣味人が旅しながら集めるコレクターアイテムになった。

「浜松張子の達磨は東日本風の白目の目無し達磨ですが、手足がある『酒買い達磨』の方は西日本風に多い黒目の鉢巻達磨。いろいろな土地の特徴が吸収されて面白い」

佐野学芸員の言葉や人形を通して、日本のほぼ中央にあり柔軟な土地柄の浜松らしさに触れることができた。

旅や写真が一般的でなかった時代、木版技術を使った玩具絵の書は、土地土地の玩具が知れ渡るきっかけとなった。



形や表情がそれぞれ異なる「犬ころがし」。右が三代目・二橋志乃さん、左と中央が四代目・二橋加代子さん作。

浜松市博物館学芸員の佐野聖子さん。「浜松には、風車、凧、姉様人形などの郷土玩具もありますよ」。

明治時代の郷土玩具研究者・清水晴風（しみずせいふう）が描き編み、郷土玩具ブームの幕開けとなった書『うなゐの友』。全部で6巻刊行されている。

大正時代の発刊の『起上小法師（おきあがりこぼし）画集』。絵は玩具絵の巨匠で蒐集家でもある川崎巨泉（かわさききょせん）が手がけた。

浜松張子独自の構造「ころがし」をはじめ、博物館では多くの張子を所蔵。

「交流」ホームページにて浜松市のスポットを詳しくご紹介しています！

浜松市 まちあるきMAP

徳川家康や東海道にまつわる史跡が豊富な浜松は、スズキ、ヤマハ、ホンダ、カワイなど、世界的にも名を知られる企業が集積するものづくりのまち。温暖な気候に恵まれ、浜名湖うなぎや三ヶ日みかん、浜松餃子など、美味しいものもふんだん。

A 浜松市博物館

原始から近代まで、浜松地域の歴史資料を紹介・展示する。縄文時代の貝塚で、国指定の史跡「蜆塚遺跡」に隣接している。

浜松市中区蜆塚4-22-1　TEL／053-456-2208
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamahaku/

B 鴨江アートセンター

1928年（昭和3年）に浜松警察署庁舎として建てられ、展示やイベントなど、市民の文化芸術活動の拠点として活用されている。

浜松市中区鴨江町1　TEL／053-458-5360
https://kamoeartcenter.org/

C 木下恵介記念館

浜松出身の映画監督・木下恵介氏の功績・資料を展示する。1930年（昭和5年）に浜松銀行協会集会所として建てられた瀟洒な建物を活用。

浜松市中区栄町3-1　TEL／053-457-3450
https://keisukemuseum.org/